

---

Alternative **その答えは**

ゲイヴン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Alternative その答えは

### 【Nコード】

N4466BA

### 【作者名】

ゲイヴン

### 【あらすじ】

A C f aの主人公が、M u v - L u v A l t e r n a t i v eの世界に飛び傭兵として戦い抜いていくなかでどのような答えを見つけるのか。

作者は、小説の投稿が初めてでゲームはプレイしますがうまく書けるかなり怪しいレベルです。衝動で書きだした感じなのでご容赦ください。

## プロローグ（前書き）

初めての小説の投稿 + 文才皆無の人間ですのでもうまくやっていますか不安ですが、がんばります。

## プロローグ

アンサラーの撃破を確認。ミッション完了だ。「セレンから通信が入る。クローズプランを第一段階に進めるためテルミドールからの依頼で俺は、AFアンサラー撃破の依頼を受け現在そのミッションが完了した所だった。

「アンサラーが落ちた。企業連はどう動くかな？」俺がそう言うとセレンは、

「まあ、最新型のAFを落とされたんだ落ち着いてはられないだろうさ。とりあえずミッションは終了したんだ。早く戻って来い。」  
「了解」と俺が返事を返したと同時に異変が起きる。

「何だ・・・！アンサラーの残骸から大規模コジマ収縮反応だ！！どうなっている！」セレンが驚いた声を上げる。

「どうした！セレン！！」

「急いでそこから離れる！なぜか分からないがアンサラーのAAが来るぞ！！」セレンの声を聞いて急いでその場から離れるためOBを起動するが、その瞬間アンサラーのAAが起動する。

「ダ、ダメだ！間に合わない！！」AAの光が目の前に広がっていく、

「セ、セレン！！」パートナーの名を呼んだところで俺の意識はなくなつた。

## プロローグ（後書き）

とりあえずプロローグ投稿。これだけしか書いてないのに緊張した。

## ネクスト設定（前書き）

機体設定です。

## ネクスト設定

ネクスト名   ストレイド  
頭部パーツ   HD - HOGI RE  
コアパーツ   SOLUH - CORE  
腕部パーツ   03 - AALIYAH / A  
脚部パーツ   03 - AALIYAH / L  
F . C . S   FS - LAHIRE  
メインブースター   MB11 - LATONA  
バックブースター   BB11 - LATONA  
サイドブースター   SB11 - LATONA  
オーバードブースター   KRB - SOBRERO  
ジエネレーター   LINSTANT / G  
右腕武器   063ANAR  
左腕武器   063ANAR + 07 - MOONLIGHT  
右背中武器   HLC02 - SIRIUS  
左背中武器   GRB - TRAVERS  
肩武器   SM01 - SCYLLA  
スタビライザー   頭部右   HD - HOGI RE - OPT01   頭部  
左   HD - HOGI RE - OPT01  
脚裏   03 - AALIYAH / LBS1   脚表右  
04 - AALI CIA / LUS2  
脚表左   04 - AALI CIA / LUS2

作品主人公の乗るネクストの設定です。左腕にブレードのMOONLIGHTを装備してますが、ゲームでは不可能ですが、まあこの作品は小説ですのでご勘弁してください。使用するときには、脚部に付いているバックブースターの部分にライフルを取り付けられるモジュールが付いていますのでそこにライフルを装着してから使用し

ます。

武器の設定ですが、ゲームと違いオリジナルの設定があります。例えば右のSIRIUSに関しては、

- ・出力の調整が可能で調整の幅は、小さければパルスキャノンと同じ様な性能になり、最大出力の場合は、ACファンの皆さんはご存知のラストレイヴンに出てきたハンドレーガンのような性能になります。（あのOPでは、一発で敵部隊を壊滅させた性能に多くのレイヴンは、感動したはず。自分もそうでした。実際は、だまして悪いが、フロムマジックでしたが。）あとは、精密射撃が可能な設定です。

左のTRAVERSは、

- ・着弾時の爆発規模がMSACの核と同じ規模になっています。ちなみに弾数も18発だときりが悪いので20発になっています。

左右の063ANARは、

- ・形が初代ACの1000マシなので1000発に設定しています。もちろん連射できます。

肩のSCYLLA

- ・ASミサイルではなく、普通のミサイルです。敵をロックする必要がある。

ブレードに関しては、

- ・旧作品にあった光波が出せません。何で出せるのかわ後ほど分かります。

ネクストの設定で避けて通れないのがコジマ粒子の設定ですが、この作品ではご都合主義で

- ・別世界に飛んだので汚染は一切起きない設定。なおかつコジマ粒子を使っているジェネレーターは、半永久機関の設定です。（ようはガンダムOOのGN粒子と同じようなもの）OBとQBは事実上レギュの1.15見たいな感じにやりたい放題です。PAに関して



は、レーザー属種の攻撃も防げますがさすがに完全には防げません。後ネクストの全長ですが、公式では約10mちよつとぐらいですが、この小説では不知火とほぼ同じくらいの全長に設定しています。と一応こんな感じでネクストの設定は行きます。ちなみに、この機体構成で作者はゲームをプレイしてます。レギユは1.40です。もしよかったらゲームで組んで見てください。見た目重視のロマン機体です。

## 第1話（前書き）

物語開始です。がんばるぞ！

## 第1話

1998年 夏 日本

重慶ハイヴから東進したBETAが日本上陸瞬く間に西日本側が占領され現在、首都京都ではBETAを止めるための防衛線が行われていた。

「う、うわああああ！死にたくねえ！！く、来るな！！ぎゃー！！」

一機の戦術機が戦車級に群がられ管制ユニットを食い破られ食われる。

「救援はまだか！このままじゃ防衛線を破られる！HQ！救援はどうなっている！！」

いくら倒しても次から次に溢れてくるBETAの数に押されてこの防衛線もすでに3分の2近くの機体がやられいつ防衛線が抜かれてもおかしく状態であった。

「現在、他の防衛線に敵が進行しているため救援に回れる部隊がありません。現在の戦力で対処願います。」HQから通信が入る。

「ふざけるな！もう弾薬も残り少ない、戦力の3分の2近くがやられた現状でどうしろと言うんだ！！」

部隊の隊長は返信する。しかし、  
「他の防衛線も同じ状況です。現状の戦力での対処をお願いします。」

返ってくる返信は先ほどと同じ。

「ぐううう！！了解！！！！」

無念の声で通信を切る。

「隊長！！救援は！！」

部下の一人が通信してくる。

「救援は来ない！！他の防衛線にも敵が進行してきて救援に回れる

部隊がない！現状の戦力で対処する！」

「そんな！無理ですよ！！この状況で敵の進行を防ぐのは不可能です！！！」

モニターを見ればこちらに接近してくる要撃級、突撃級、戦車級の大群その後ろには、光線級に重光線級の反応がある。部下の言うことはもつともだが、

「ここで防がなければ京都から避難している一般市民に被害が出る！何としても食い止めるんだ！！！」

部隊に激を飛ばすが状況は最悪、全滅も時間の問題かと脳裏に浮かんで来た時部下の一人から通信が入る。

「隊長！西から高速で飛翔してくる物体があります！」

「なんだと！一体何だ！」

「わかりません！しかも速度が亜音速に達しています！！！」

「ばかな！新種のBETAか！」

「まもなく視界入ります！」

部下の通信を受けてまもなくここに来る謎の物体の来る方向を見る。

「何だあれは！！！」

部下のが驚きの声を上げる。モニターに写っているのは見たこともない白い戦術機だった。

時間は少し戻る。

「一体俺はどうなったんだ？」（アンサラのAAの食らい目の前が光に包まれた所までは覚えている。直撃だったのだ俺は間違いなく死んだはず）しかも機体も無傷の状態・

「一体どうなっているんだ？」気が付けばあたり一面に気味が悪い生物の死骸や見たことのないノーマルの残骸がある。さっきまではこんなものは無かったはず一体どうなっているのか訳がわからない。

「現在地は・・・ダメだエラーで特定できない。ここは一体・・・！！！」

場所が特定できず考えていたところにレーダーに反応を感知する。

「ちっ！一体何だ・・・ものすごい数の何かが接近してくる。」レ  
ーダーに反応が出てからその数が一気に増えていく。

「何だかわからんが、ぼさっとしていっているわけにもいかない。」  
俺は、すぐにジエネレーターを起動する。

（メインシステム起動、各部、武装に異常なし。大気中のコジマ粒  
子・・・何！大気中のコジマ粒子が0だと！どういうことだ！！）  
機体に異常は見られないが、それ以上にコジマ粒子が大気中に無い  
ことに俺は驚いた。

（くそ！何が何だか訳がわからん！）俺は、頭を掻き毟っていると  
モニターに先ほどの反応した何かが写し出された。

「あれは！」俺の視界に入ってきたのは、周りに散らばっている死  
骸の生物と同じ物がこちらに接近してきている様子だった。

（何なんだあの生物は？トールラスあたりが作った新種の生物か？）  
そんなことを考えている最中も謎の生物は一直線にこちらに向かっ  
てくる。

（どう考えてもお友達になれるような感じじゃないな・・・ならば  
排除するのみ）

俺は、すぐに機体を戦闘モード切り替える。

「さてと、ここがどこはまだわからんが、まず目の前の障害を排除  
する！」OBを起動しこちらに向かってくる生物の大群に俺は向か  
って行った。

「くたばれ！」サソリのような形の生物に向かって両手のアサルト  
ライフルを撃つ。頭と思われる部分に命中するとその部分が弾け飛  
ぶ。次いで前面が甲羅のようなもので覆われた生物に攻撃を加える  
が、

「むっ？効いていないのか？」甲羅のような部分に銃創は付いてい  
るが、死なずにこちらに向かってくる。QBで側面に移動し再び攻  
撃を加える。今度は聞いたのか内臓の飛び散らせて横転する。

（種類によって能力に違いがあるようだな）今の攻撃でこの生物達

が種類によって能力に違いがあることがわかり俺は、他の生物も確認してみる。

（他には、小さい人間サイズのものやそれより少し大きめの物、奥に見えるのはこの中で一番でかいな）

モニターを見ながら確認していると突然警報が鳴り出す。

「一体何だ！」警報がなった瞬間にQBを行う。目の前を光が通り過ぎる。

「レーザーか！」一本のレーザーが通り過ぎた後も警報は止まず次々にレーザーが照射されてくる。

それをすべてQBで回避する。すぐにレーザー照射のあった位置にカメラを向けると、

「今の奴はアレが撃ってきたのか・・・」モニターに写るのは、目玉に脚が付いている生物で小さいのとでかいのがいた。

（まさか、レーザーまで撃ってくる奴いるとは、アレを先に始末しないと面倒だな）いくらPAがあるとはいえレーザーは完全には防げない。ならば、食らわないに越したことはない。

（見たところ次を撃つまで時間がかかるみたいだな。すぐに、撃てれば連射すればいいはずだ）そう確信した俺は、OBを起動し一気に接近する。

「まとめて消し飛ばす！」左背部のグレネードキャノンを起動し打ち込む。目玉の小さいのもでかいのもまとめて吹き飛ばす。面倒な相手を片付け残りを掃討する。一番でかい奴が触手様なもので攻撃してくるがQBで一瞬でよける。

「あの目玉以外はあまりたいしたことは無いみたいだが、数が多いなライフルは弾が持たないな。」

そう考え俺は右背部のハイ・レーザーキャノンを起動しチャージを始める。

「うまいこと固まっているな・・・吹き飛ばす！」

チャージ完了と同時に集団の中心にレーザーを打ち込む着弾後、四方100m以上が吹き飛ばす。煙が晴れそこには、生物の死骸の山が

出来上がっていた。残りはわずかですぐに排除する。

「これで終わりのようだな」あたりを見渡すとこちらに向かってくる生物はおらず一息つく。

「しかし、この生物は一体何なんだ？それに、俺はなぜ死んでいない？」訳のわからない事だらけだがここでじっとしていてもしょうがない。

「とりあえず移動しよう。もし人間に会えばここがどこか聞けば良い。」

OBを起動し空に飛び立つ。そして、時系列は戻る。

## 第1話（後書き）

何か戦闘シーンがうまく書けてない。こんな感じで進んでいくと思います。読んでくださる方々がいれば幸いです。



## 第2話（前書き）

一 応京都防衛戦までを書いて見ました。相変わらずの駄文です。

## 第2話

（戦闘している様子が見られて来てみれば、案の定だな。しかし、あのノーマル達は一体・・・）俺は、例の生物と戦闘中のノーマルをみながらそんなことを考えていたが、

（明らかに劣勢だなどうやら防衛線の守りのようだが、抜かれるのは時間の問題だな）せっかく見つかった情報源を無駄にするわけにはいかない。

（ここは、手を貸してやるか）俺は、そう考えて戦闘領域に突入した。

モニターに写る戦術機は、今まで見たことも無いような機体だった。

「あの機体は何だ！」

部下がああ機体をみて言う

「データを確認しましたが、該当する機体なし！」

「一体あの機体は？」

突然戦闘領域に侵入してきた正体不明機に戸惑っていると、

「っ！レーザー照射警報！」

上空の正体不明機に向かってレーザーが照射される。やられる誰もがそう思った瞬間、

「なっ！！」部隊の全員が驚いた何とあの機体は信じられないような動きと機体速度でレーザーを回避したのだ。

「な、何だあの動きは！」

「一体、どうやって避けたんだ！まったく見えなかったぞ！」

「信じられません！あの機体が、レーザーを回避したときの速度が時速1200km/hを超えています」

「ばかな！それじゃあ中の衛士が無事ではすまないぞ！」

この場にいる全員が驚愕の声を上げる中、正体不明機は背部についている砲塔を起動してレーザー級に向かって発射した。着弾した瞬間

間違った爆発が起きる。その衝撃で機体がバランスを崩す。

「な、何が起こったんだ！」機体のバランスを元に戻して確認を取る。

「た、隊長……。」

部下が通信が入る。

「どうした！」

「い、今あの機体の攻撃で全レーザー級が消滅しました。」

「な、なんだと……。」

部下からの私は耳を疑った。

「間違いないのか！」

「間違いありません。重レーザー級20、レーザー級50、すべて撃破されました。」

「し、信じられん。」

あまりの出来事に呆然としてしまう。

「あの機体に通信は！」

「先ほどからしているのですが、繋がりません！周波数が合いません」

「どづいことだ！」

通信が繋がらないと報告を受けているとあの機体はこちらに向かってくる。すると

「無事なようだな」外部スピーカーから声が聞こえてきた。こちらもすぐに外部スピーカーに切り替えて答える。

「あ、ああ君のおかげだな」

「いや、それよりも聞きたいことがあるのだが……。」

「隊長！！他のBETAがこちらに向かって来ます！！」  
部下が伝えてくる

「何だと！各機、陣形を組み直せ！機体の損傷の激しいものは、後ろに下がれ！」私が指示を出していると、

「どうやら、邪魔が入ったようだな。」

「ま、までどうするつもりだ！」私が呼び止めると、

「あんたらの機体じゃアレだけの数の相手は厳しいだろ。俺が片付けてやる。」

「何を言っているんだ！敵の数は1000を超えているんだぞ。私が、そう伝えるが」

「問題ない。あの程度の相手なら1000ぐらいどうとゆうことはない」さらに彼は、

「それと、部隊を下がらせてくれないか？全力で戦闘すればそちらが巻き添えを食うぞ。」

「いや、しかし・・・」

「問答している余裕はない。俺が指定したポイントまで部隊を下がらせる。後俺の通信の周波数を教えておく。ポイントに付いたら連絡しろ。いいな」

「わ、わかった。指定したポイントまで部隊を下げよう」私がそう答えると彼は敵に向かって行った。

「さて、数が入るかもしれないがそれだけでは勝てない。」元々ネクストは、それに乗れるリンクスの適性のある者が極端に少ないため稼動機体数の絶対数が少なかったそのために企業は代替がほぼ不可能なネクストよりも多数の凡人で構成され代替も効くAFに主力をシフトした経緯がある。しかし、上位のリンクスになればAFを破壊するジャイアントキリングも可能であり俺自身も企業の主力AFを多く撃破してきた。この程度では脅威にもなりはしない。

（だが、これが1万や10万単位で攻めて来られたら堪らないがな）そんなことを考えながら敵に銃口を向ける。

「全力で戦うにしてもまずはあのノーマル部隊がポイントまで下がりきるまでこちらに敵を引き付けなとな。」ハイ・レーザーやAAを使うとなると現在の状況では巻き添えになる可能性もある。そのためノーマル部隊には引いてもらわないと困る。

「さあ、行こうか！」敵に攻撃を開始する。

対ネクスト用の特殊弾丸が火を噴く次々に敵に命中しはじけ飛ぶ。

（あの甲羅が付いた奴以外は脆い事はわかってる。そいつにして  
も大量に打ち込めば倒せるかも知れんが弾の無駄づかいになる。側  
面や後ろに回れば問題ない、ハイ・レーザーであれば正面から倒す  
ことも問題ないだろう。）そんなことを考えながらハイ・レーザー  
キャノンを展開出力調整し発射する。甲羅の奴も含めて敵がレーザ  
ーで蒸発する。

「パルスキャノンクラスの出力でも対処可能か。」最小の出力でも  
問題なく倒せる。ならばさっさと片付けるとしよう。レーザー連射  
に切り替えて次々に敵を貫いていく。敵が接近してくればすぐにQ  
Bで回避、近距離適正の高いライフルで敵を葬る。戦闘開始から短  
時間で敵は見る見るうちにその数を減らしていく。半数くらい倒し  
たところで通信が入る。

「聞こえるか！こちらは指定のポイントに到着した。そちらの状況  
は？」先ほどスピーカーで対応した男兵士から通信が来る。おそら  
く部隊の隊長なのだろう。

「問題ない。もう半数は片付けた。」俺がそう返すと  
「なっ！」男の驚愕の声が漏れてきた

「残りもすぐに片付けてそちらに向かう少し待っていてくれ。」俺  
は、そう伝えると通信を切り戦闘に戻った。

正体不明機体の衛士に指定されたポイントまで後退し通信を彼にす  
ると驚きの返信が来た。戦闘開始から短時間で半数もの敵を倒し残  
りもすぐに片付けると言い残り通信を切った。モニターを見ると脅  
威的なスピードで敵が倒されていく。そして、モニターに写るその  
機体の戦闘の様子に我々は、ただ驚くことしかできなかった。

「何なんだあの動きは？どうしてあんな軌道で動いて衛士は何とも  
無いんだ！」

「おい！今の背中 of 砲身から発射されたのレーザーじゃないか！」  
「光学兵器が実用化されたなんて聞いてないわ！」

部下達から驚愕の声が上がる。私自身目の前のことが現実なのか頭

が付いて行かない。ただ、あの戦術機がたった一機で大量のBETAを倒していくのをただ呆然と見ているしかなかった。そして、すべての敵が倒されて彼から通信が来た。

「これで全部片付いたか。」レーダーを確認し敵がすべて倒されたことを確認すると通信を入れる。

「聞こえるか？敵はすべて片付けたそちらに敵は向かっていないか？」そう尋ねると

「いや、こちらに敵は向かってはいない」相手からそう返事が帰ってくる。

「そうか、すまないが聞きたいことがあるのだがいいか？」

「あ、ああかまわないが？」

俺は、ようやく今の自分の状況がわかると思い尋ねた

「まず、ここは一体どこだ？」俺がそう尋ねると相手は「はっ？」疑問の声を漏らした

「ここが何処つて・・・日本だがなぜそんなことを聞くんだった？」

「ちょ！ちよつとまって？日本だと？ここは日本なのか？」

「ああそうだが。」相手は、何を当たり前のことを言っているんだという感じで返事をする。

「じゃあ、そのノーマルは一体なんだ？そんな機体見たことも無いんだが？」俺がさらに尋ねると、

「ノーマル？何のことだこれは帝国の第三世代戦術機「不知火」だ。」そう返された。

「戦術機？帝国？一体何だそれは？それに帝国とは何だ？」再度尋ねると

「帝国とは何だとはおかしなことを聞くな？日本帝国に決まっているではないか。」その返答に俺は驚き、

「日本帝国だと？日本は帝政の国では無かったはずだろ？それになぜ日本と言う国が存在している？もう無くなつたはずだ」俺が言う

「な、何を言っているんだ！日本は健在だ！現在BETAの進行を受けているが滅んでないぞ！」俺の言ったことに怒りの声をあげる。俺は、今の話を聞いてかなり混乱していた。

（日本が存在している？どういふことだ？数十年前の国家解体戦争でなくなっただけなのに・・・それに聞いたことがない言葉を言っていたな）

「BETAとは何だ？」俺が尋ねると

「BETAが何だかだと？何を言っているんだBETAは我々人類の敵だ。さつき君も戦っただろう。一体何を言っているんだ？」その言葉に、

「BETA？人類の敵？一体それは・・・」俺がそう言いかけたところで

「どうした・・・！わかった一旦補給をしたらすぐに向かうぞ！何か通信があつたのか向こうが慌しくなる

「すまないが、他の防衛線に救援に行かなくてはならない。それとこちらからも質問させてくれ？君の所属は何処だ、君のような者が救援に来るとも聞いてはいない。」相手からのその言葉に俺は少し考える。

（今の話からわかったことは、ここが日本だと言うこと、あの生物はBETAと言うことそして、おそらくあの戦術機と言う機体の部隊は日本の軍隊なのだろうということだ。）もしいいければ現在の状況が詳しくわかるかも知れないが、こちらは身元が怪しい状況だ。最悪拘束される可能性が高い。そうなると面倒だ。しかたない、俺に所属はない傭兵だからな。」相手にそう伝えると

「傭兵？」

「ああそうだ。そんなことより良いのか？今はこんな風に話していただける状況じゃないんじゃないか？」

「了解した。深くは聞かないことにしよう。こんな状況だしな。だが、礼だけは言わせてくれ。部隊の危機救ってくれて感謝する。」

「聞き分けがよくて助かる。」

「いや、君はあまり詮索されたくないのだろう？軍人として失格かもしれないが恩人にこれ以上は失礼だろ。」

「そうか、では俺は行くぞ。」そう言い残し通信を切るうとする  
「待ってくれ。最後に名前を聞いておきたいが？」そう言ってくる  
「名か・・・俺は、レイヴンだ。」そう言い通信を切りOBを指導しその場を後にした。

「・・・レイヴン。」そう言い残した機体が一瞬のうちに空に消えていくその様子を私は静かに見つめていた。

帝都が燃えている眼前に広がるのはかつて千年の都として栄えた京都の光景それが紅蓮の炎で包まれている。BETAの日本進行から約一ヶ月たった一ヶ月で西日本を制圧されこの帝都陥落も時間の問題となっていた。

「民を逃がすためとはいえ自らの手で京の都を焼くことになるとは無念だ。」

そうもらすのは、帝国近衛軍第16大隊指揮官である五撰家が一つ、斑鳩家の若き当主

斑鳩 影比佐である。殿軍として皇帝と将軍の帝都離脱を指揮して現在状況は最終局面を迎えていた。

「閣下、頃合に御座います。御下知を！」

側にいる副官である月詠 真耶から通信が入る。最後の民の安全圏への脱出確認がされる。後は、BETAを排除しタイミングをみて退却するのみ。

「うむ。皆の者、これが最後の攻勢ぞ！殿を預かる我が近衛の戦い、この千年の都に刻みつけてゆけい！！」

「・・・御意！」「・・・」

「全機！我に続け！！」近衛軍第16大隊全機が跳躍ユニットから轟音を鳴らして敵に突撃して行った。



「あの燃えている街で反応があるな。」先ほどの部隊と別れてから移動していると燃え盛る街で先ほどのBETAと戦術機が戦闘しているのが確認できた。俺は、カメラでその様子を確認していた。

(まさに地獄だな)燃え盛る街の中でBETAと戦術機が戦闘している様子は正にその表現通りだった。

「あの様子だと。あの部隊は殿のようだが、先ほどの部隊よりも動きがいいな。だが、数が違いすぎるのもあるが、機体の性能が低すぎる。」戦術機とやらの性能は明らかにノーマルACのそれより劣っている。今見える部隊は先ほどの部隊よりも動きがいいがそれでも全滅も時間の問題だろう。

(ここは、このまま様子を見るか？だが・・・)こちらに向かう最中もいくつかの戦場は見てきたが、ほぼ収束傾向だった。大半が人間の敗北した様子だったが、現在この街での戦闘がほぼ最後なのだろうと予想できる。

「そう考えればあの部隊を援護して接触を図るのが最善か。」俺はそう考えると背部のハイ・レーザーを起動し精密射撃モードに切り替える。

「さあて、行くぞ！！」ターゲットをロックして俺は、攻撃を開始する。

「はあ！」赤い瑞鶴が長刀で要撃級の首を飛ばす。返り血を浴びながら次の敵に切りかかる。

「月詠！深追いするな！各機！光線級排除後に撤退を開始する！それまで死ぬなよ！」

「……御意！……」

斑鳩が指示を出したその時、敵集団が左右に別れる次の瞬間、

「レーザー照射警報！」

「全機、乱数回避！」

斑鳩の指示で全員が回避行動に移ろうとした瞬間、光線級の横から青白閃光が光線級を次々に打ち抜いていった。

「目玉の奴は、全部排除できたな。」モニターで確認取ると俺はすぐにOBを起動して突撃を開始する。

「閣下！先ほどの閃光と同じ方角から接近する物体あり！・・・ばかな！時速1400km/h以上の速度でこちらに來ます！」

「何が来るのだ！」

「わかりません！視界に入ります！」

部下の通信からモニターを見ると見たこのない戦術機がすさまじい速度で目の前に現れた。

「聞こえるかその部隊！」

外部スピーカーから声が聞こえてくる。

「状況から見るとあんたらは、殿の部隊たる時間稼ぎも十分のはずだ。ここは俺が引き受けるすぐに撤退しろ。」

俺がそう伝えると赤い戦術機から女の声で、

「貴様！ふざけるな！！いきなり出てきて撤退しろなど何者かもわからんような奴に言われたくないわ！」

女は怒りに震えた声で返答する。

「よせ月詠。部下が失礼した貴官の援護に感謝する。」

指揮官である斑鳩がそれを諫める。  
「あんたがこの部隊の隊長か？ならすぐに指示を出して撤退しな。それにそんな丁寧な礼などいらぬ俺は、傭兵だ。感謝されるような存在じゃない。」

俺は、隊長と思われる男にそう返事をする。

「傭兵？そうかだが傭兵であろうとも助けてもらったのは事実それに対して礼を述べるのはおかしくあるまい。」

「・・・わかった。素直に受けとっておくよ。」俺はそう答える。

「すまない。それと後で我々と同行してもらえないか？貴官の乗っている機体や使っている兵器を私は、見たこともない。まして傭兵が使っているなど疑問が多すぎる。」

男はそう俺に言ってくる。

「いつもの俺ならNoと答えるところだが、わかった戦闘後にあんたに同行しよう。」

「そうか感謝する。月詠！全機に撤退を傳達しろ！」

「・・・閣下。わかりました。全機に告ぐこれより撤退する！」

赤い機体の女が指示を出すですべての機体が撤退していく

「では、のちほど」

青い隊長機は、そう言い残して撤退して行った。

その後、残った敵を片付けた後俺は、先ほどの青い隊長機の部隊に合流した。

このBETAの日本進行に際し帝国は、犠牲者3600万人人口30%が犠牲になり、約一ヶ月に及ぶ防衛線の末、帝都京都は陥落、首都は東京に移されることになる。

しかし、この戦いに置いて驚異的な性能を持った一機の白い戦術機が戦場で確認される。後にこの機体が世界に衝撃をもたらすことになるがそれはまだ少し先のことである。

## 第2話（後書き）

読んでみておかしく感じる方もいるかもしれませんが、感想お待ち  
しています。

### 第3話（前書き）

第3話です。長かった。そして疲れた。

### 第3話

で、現在その傭兵はどうしておる?」

巨漢の男が尋ねる。

「はっ。我々と合流後に基地の別の部屋に待機しています。」

月詠真耶が男の問いに答える。「そうか。」と男は返事をする。その後何か考えるように目を閉じる。

「紅蓮閣下。閣下の疑問はもつともです。私自身その目で実際に見て驚きを禁じ得ませんでしたから。」

斑鳩が紅蓮に対して言う。現在彼らは帝国軍白陵基地の会議室である映像を見ていた。それは、先の京都での防衛戦で確認された白い戦術機の映像であった。会議室でこの映像をみた者たちは皆驚愕の表情になっていた。その戦術機は今まで自分達が見てきたどの戦術機でもありえない機動力及び戦闘力を有していた。

・現在の戦術機は、推進剤を使用し跳躍ユニットで空を「跳んでいく」に対して

跳躍ユニットもなく推進剤も使わずに「飛んでいる」こと・

・亜音速に達する機動力。また、その速度を回避手段としていること。

・そして、どの国でも米国でさえも実用化さえ出来ていない光学兵器を有していること。

等上げればきりがないほどだ。これほどの機体が今まで知られていなかったことが考えにくく、またそれを使用しているのが一介の傭兵だというのだから疑うなというのが無理な話である。

「巖谷よお主はこの映像を見てどう思う?」紅蓮は帝国陸軍中佐で技術廠・第壹開発局副部長でもある巖谷 榮二尋ねる。

「技術者としてみてもこの機体の性能は驚愕に値します。この機体は明らかに戦術機とは違う設計思想で作られたものだと思います。また、傭兵としての観点から見てもこれを操作している者が、超一

流の腕を持っているのがわかります。」

巖谷やそう答える。

「鎧衣、お主の方で何か掴んでいることはないか？」

紅蓮は情報省外務二課長 鎧衣左近に尋ねる。

「いやはやこちらの方でもまったくわかりません。この機体はまさに突然現れたようなものでもしかしたら幽霊かもしれませんね。ハハハ。」

紅蓮の問いにとぼけた様に答える鎧衣。

「香月博士は、何かご存知ありませんか？」となりに座っているオルタネイティブ4の責任者である香月 夕呼に尋ねる。

「いえ、私も何も知りません。ですが……」

「何だ、香月博士？」何かを言おうとしている夕呼に紅蓮が問いかける。

「この機体の性能は、明らかにこの世界の技術力を超えています。つまりオーバーテクノロジーです。今まで知られていなかったこと自体がおかしいく、また鎧衣課長の情報網にもかからないそんなことはほぼ不可能だと思います。」そう言うと夕呼は少し考えてあることを考える。普通であれば荒唐無稽話だが、その可能性が一番高い。そう考え夕呼話す。

「その傭兵をここに呼んで話を聞くことはできませんか？」と夕呼は言う。

「何だと？なぜだね香月博士？」夕呼の発言に紅蓮の表情が曇る。

「私の提唱しているある学説があるのですが、その傭兵がそれに当てはまる人物かも知れないのです。話を聞いてもしもそうであればあの機体の謎も解けるかもしれません。」

夕呼はそう返答する。

「しかし……」皆が口ごもるなか上座の席に座っている人物が発言する。

「わかりました。香月博士の言うようにその傭兵をここに呼びましよう。」

「で、殿下!」

真耶が驚く。

「どの道我々がここで議論しても答えは出ません。ならばその者をここに呼んで話を聞くのが早いのではないのでしょうか?」と日本帝国国務全権代行行政威大將軍 煌武院 悠陽は言い周りを見渡す。

「確かにここで我らだけで議論してもしようがないでしょうな。月詠をその傭兵をここに呼んでまいれ。」紅蓮は真耶に伝える。

「・・・わかりました。あの者を呼んでまいります。」

真耶は納得していない様子であったが、それは致し方ないことである悠陽の警護を担当する身として悠陽を得体の知れない者と合わせるのは抵抗があった。まして相手は傭兵である。いくら戦場で援護してもらったとはいえそれとこれとは状況が違う。信用しろと断ることはできない。だが、悠陽が呼ぶように言っているのだ

真耶は、会議室を出てあの傭兵の部屋に向かった。

「ふう〜。暇だ。」ベッドの上で俺は呟いた。青い戦術機が隊長機の部隊と合流した後、この基地に着いたはいいが、熱烈大歓迎であった。機体を降りてすぐ銃を持った兵士に囲まれたまあしょうがないことではあるが、その気に慣れはその場にいた全員を無力化できたがそんなことをするほど馬鹿ではない。とりあえず、独房でない普通の部屋に案内され案内した兵士から「しばらくここで待っている。」と言われた。それから丸1日部屋から出してもらえない。

(とりあえず、今の状況が把握できていない以上うかつには動けない)自分が日本にいること自体がおかしいのだ。そんなことを考えていると部屋のベルがなる。

「どうぞ」俺が返事をするドアから赤い服を着てメガネをかけた髪の長い女が入ってきた。

「誰だ?」俺が尋ねると



「戦場では顔が見れなかったからな。私は日本帝国斯衛軍大尉 月詠 真耶だ。」

そう目の前の女が答えると、

「その声、そうかあの赤い機体に乗っていたのは、あんたか。」

「ああ、そうだ。」と月詠と言った女は答える。

「で、何かようか？」俺が尋ねると、

「お前から話を聞きたいと言われている方々がいるので迎えに来た。」

「

尋問か？」

「違う、普通に話を聞きたいだけだ。」月詠は答える。

「いいだろう。連れて行ってくれ。」俺は、そう返事をするベッ

ドがら立ち上がる。

「こつちだ。」月詠が歩き出す。俺も後をついて行く。

歩き始めてからそう時間も経たずに目的の場所に着いたのか月詠がドアの脇のボタンを押す。

「月詠です。件の傭兵を連れてきました。」そう言うと中から「入れ」と返事があり。月詠がドアを開ける中に入る。それに続いて俺も中に入ってしまった。

「月詠です。件の傭兵を連れてきました。」月詠大尉が例の傭兵を連れてきたようだ。

「入れ。」紅蓮大将が答える。

「失礼します。」先に月詠大尉が入ってくる。続いて例の傭兵が入ってきた。

（結構若いわね。20台半ばくらいね）そんなことを夕呼は考えながら傭兵を見ていた。

（でも、あの傭兵普通じゃないわね。）夕呼がそう感じたのは、紅蓮、巖谷、斑鳩が厳しい表情をしていることだ。月詠大尉にしてもそうだが表情がかなり険しい。鎧衣はいつもどおりの表情でわからないが。月詠が殿下の横に付き、傭兵が下座の席についてから話が始

まった。

「うむ。よく来てくれた。わしは紅蓮醒三郎日本帝国斯衛軍大将の任についているものだ。」

「私は、巖谷 榮二。日本帝国陸軍中佐で技術廠・第壹開発局副部長の肩書きがある者だ。」

「え、次は私ですかね日本帝国情報省外務二課長 鎧衣左近と言います。どうも初めまして。」

「そなたには戦場で助けられたな、日本帝国斯衛軍第16大隊指揮官 斑鳩 影比佐だ。」

「私は、香月 夕呼この帝国軍白陵基地内にある国連軍の副指令よ」

「私は、日本帝国国務全権代理行政威大將軍 煌武院 悠陽と申します。そなたのおかげで多くの命が救われました。そのことに深い感謝を。」

ここにいる者たちの自己紹介が終わり最後に目の前の少女が俺に感謝し頭を下げた。

「いや、頭を下げる必要はない。俺は傭兵だ。戦いで糧を得ている者だ。戦うことが当たり前者に礼など不要だ。」

「いえ、傭兵であろうと貴方のおかげで救われた命があります。それに対して感謝させてください。」目の前の少女、煌武院 悠陽はそう答えた。俺は、

「ああ、わかった。」と返事をした。

「さて、お主を呼んだのはおぬしが何者なのかを聞くためだ。」

紅蓮と言った巨漢の男が話す。それに対して俺は、

「そうだな。俺について話そうか。すまないがずっと傭兵をしているので礼儀作法などはまったくわからない。それでもかまわないかな？」俺がそう問いかけると、

「構いませどうぞ話してください。」と煌武院 悠陽は答える。

「そうか。では話そう。まず、俺の名前だが、あいにく物心ついたときから戦場にいたせいで名前はない。傭兵としての名としてレイ

ヴンと呼ばれていた。」

「ほ〜レイヴンですか。たしかワタリガラスでしたか。なるほど傭兵にぴったりの名ですね。」鎧衣と名乗った男がとぼけたような話し方で感心したように頷く。

「じゃあ、今はレイヴンと呼ばしてもらおうね。早速だけどレイヴン？貴方の乗っている機体について教えて頂戴。」香月と言った女が俺に質問してくる。

「ネクストを知らないのか？」俺が驚いてそう答えると、

「いえ聞いたことがないわ。巖谷中佐は？」

「いや、私も初めて聞く名だ。」話を振られた巖谷と言う男がそう答える。

「ネクストとは、正式名称アーマードコア・ネクストと呼ばれる機動兵器だ。本当に誰も知らないのか？」俺が周りを見渡すと皆一様に知らない様子だった。

「そのネクストと呼ばれる機体は何処で作られたんだ？」巖谷が質問する。

「ネクストを作ったのは企業連と呼ばれる。軍需企業だ。」俺が答えると、

「企業連？なんだそれは？」巖谷が答える。

（どうなっている？ネクストも企業連も誰も知らないなんてことがあるのか？）そう考えながら俺は、

「すまない、俺からも質問をさせてくれ。」

「うむ、かまわんが。」紅蓮が答える。

「すまない。では、BETAとは何だ？」俺が質問すると

「お主、何を言っているのだBETAとは我々人類の敵でお主も昨日戦ったであろう。」

紅蓮がそう答えると、

「そのBETAと戦ったのは、昨日が初めてだ。」俺がそう言うと「馬鹿なことを！BETAと戦ったことがないなど！それならお前は今まで何と戦ってきたのだ！」月詠が怒声を上げる。

「何と戦ったきたかだと？決まっている人間だ。そんなの当たり前だろう。」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！君は、あのネクストという兵器で人間と戦っていたのか！」巖谷が驚きの声を上げる。

「当たり前だ。ネクストはカラードに登録されているだけでも30機以上いる。そいつらとも戦うことがあるんだ。」

「そのカラードって何よ」夕呼が尋ねる。

「俺達傭兵を共同管理する組織だ企業連が作ったものだ。」俺が答えると

「聞いたことないわね。鎧衣課長貴方は？」

「いえ、聞いたことがありますね。」鎧衣は答える。

おかしい、なぜこんなに話が噛み合わないそう思いながらも俺はさらに質問してみる。

「なぜ、日本が存在している？」俺が質問すると

「日本が存在している？何を言うんだ、BETAの進行を受けているが滅ぼされてなどいないぞ。」斑鳩が言う。

「いや、そういう意味ではなく日本と言う名の国は数十年前になくなったはずだ。」さらに俺が質問すると、

「ちょっとまちなさい。何で日本が数十年前になくなっているのよ？」夕呼が答えると、

「数十年前の戦争で世界中の国家が解体されたからだ。だから、あんたが副指令をしている国連軍も既にないはずなのになぜ存在している？」

「国家が解体だと！何を言っている世界中の国は解体などされていない！BETAの侵略を受けた国々はあるが他の国に移住したりして国家は存在している！」真耶が反論する。

その後も話は続いたが、話は噛み合わないまま進んだ。

（まさかね・・・でも、この話の前は確証がなかったけど、こいつの話の内容から可能性が高くなったはね）私は、それを確認するた

めに

「皆さん少しいいでしょうか？」私は周りを見渡す。

「香月博士、何か？」悠陽が尋ねる

「レイヴンが来る前に私が皆さんに言ったことがあるのを覚えていますか？」私が訪ねる。

「確か、香月博士の学説が彼の謎を解けるかもしれないというものでしたね？」

殿下が答える。

「はい。私が提唱した学説は因果律量子論と言いますが、この学説では平行世界と言う概念の仮説が立てられています。」

「平行世界？それは、どういうもののですか？」すると尋ねる

「この世界と限りなく似ていながらどこどころ違う部分がある世界です。例えば紅蓮大将、大東亜戦争で日本が勝っていたらどうなつたと思いますか？」

「うむ。もし勝っていればこの国は今のようないかなったかも知れんな。」

紅蓮が答えると、

「その通りです。他にももし今回のBETAの進行で九州に台風が上陸しなければ被害はもっと少なかったかもしれない。そういった結末がある世界が存在するという仮説がこの学説で立てられています。」

「香月博士、それが彼やあの機体の謎と何が関係あるのですか？」斑鳩が尋ねる。

「単刀直入申しますと、彼はこの世界とは違う世界から来たということですよ。」

夕呼の発言に皆が呆然となる。

「香月博士！そんな馬鹿な話があるはずがありません！」月詠が言う。

「うむ。月詠の言う通り。いくらなんでもそれは些か無茶話ではないですかな。」紅蓮も月詠に同意するが、

「ですが、彼の話の内容、我々の話す内容がまったく噛み合わない。事はどう説明します。」

「彼が、作り話をしていると言う線は？」 巖谷が尋ねる。

「それにしても、内容が具体的過ぎます。それに、最初にも言ったように荒唐無稽な話になると言いました。」 夕呼がそう返すと、

「レイヴン、そなたはどう考えますか？」 悠陽がレイヴンに尋ねる、  
「……俺が違う世界から来たのかはわからんが、俺の機体に今までの戦闘記録や兵器についてのデータがある。それを見て判断してもらいたい。」 レイヴンはそう答える。

「なるほど、たしかにデータがあればそれをしてから判断してもいいですね。」 鎧衣が言う。

「そのデータはすぐに準備できるのか？」 斑鳩が尋ねる。

「機体にデータをこちらにある記録メディアに書き込んでくる。それを写せるプロジェクターがあれば問題ない。」

「なら問題ないわね。プロジェクターはあるし、後は貴方がデータを持ってくればいいだけよ。」

「わかった。すぐに取ってこよう。記録メディアは？」

「真耶さん、準備してあげてください。」

「はっ！わかりました。」 月詠が俺のほうに来る

「機体の場所まで案内しよう。付いて来い。」

「わかった。」 俺は、そう返事をすると機体のところに向かった。

機体からデータを取ってきてそれを映し出す準備をする。

「準備できました。」 月詠が皆に言う。

「ご苦労。ではレイヴン始めてくれ。」 紅蓮が俺に促す。

「ああ、わかった。」 俺は、機体にあったデータを見せ始める。

「まずは、世界情勢の状況を出そう。俺の世界の国家は政府が統治能力を徐々に失い、それに伴い各地でテロ行為や暴動が頻発していた。それらを鎮圧し、秩序の回復を図るため、軍隊はより強力かつ高度に機械化され、軍に様々な兵器を供給する軍産企業もまた、数

社の企業から成る強固な軍産複合体を形成し、その影響力を強めていった。だが加速する世界の破綻は徐々に酷くなり、ついには経済システムが存亡の危機に陥るに至ってしまった。

そこで、出てきたのが実質的最高権力組織となっていた6つの企業組織だ。彼らは統治能力が無くなった国家に変わり新しい統治体制の確立を目指して世界中の国家に対して宣戦布告し全面戦争に突入した。」

「ばかな！ただの企業が世界を相手に全面戦争など正気とは思えん！」 巖谷が言う。

「普通なら無謀だが、企業側は勝算があったからこそ戦争に突入した。」 俺が答える

「その勝算は？」 夕呼が尋ねる。

「すべては、戦争の7年前になる。とある新物質が発見されたことから始まった。その物質は、発見者の名前を取ってコジマ粒子と命名された。」

「コジマ粒子とは何だね？」 鎧衣が尋ねる

「コジマ粒子は、軍事転用のみに有効な物質でこれを利用したさまざまな兵器が開発された。そして、コジマ粒子の特性をフルに活用した機動兵器が開発された。」

「それは、もしかして・・・」 夕呼が尋ねる

「そう、ネクストだ。アーマードコアとはコアと呼ばれる胴部を中心に頭部・腕部・脚部など各種のパーツを組み合わせて制作される機動兵器だ。そこにコジマ粒子を使った技術を使って作られたのがネクストだ。そして、ネクストが完成したことで従来のアーマードコア「ノーマル」といわれるようになった。」

「なるほどね。ネクスト、つまり次世代ね。」 夕呼が頷く。

「ネクストに使われたコジマ粒子はその技術によってネクスト特有の機能にされた。」

「その機能とは？」 巖谷が尋ねる。

「まず一つ目は、コジマジェネレータの搭載だ。ジェネレータ内部

でコジマ粒子を生成しそれを機体のエネルギーに回すことで今までの機体よりも遥に上回る出力を得ることになった。ちなみにコジマ粒子はジェネレーター内部に少量でも残っていたら内部でまた生成が可能だ。ジェネレーターには粒子を使いきれないためにリミッターも付いている。事実上の半永久機関だ。

「永久機関そんなものが実在するとは・・・」巖谷はただただ驚いている。」

「二つ目が、クイック・ブースト(QB)の搭載だ。これはネクストの前後左右のブースタに備わる特殊推進機構の呼称で、機体を任意の方向に瞬間加速させる。その出力は極めて高く、僅か0.2秒で機体を加速させ800km/h→4000km/hの亜音速、音速突破が可能となった。俺のネクストはだいたい1200km/h以上1500km/h未滿ぐらい速度だ。このQBがネクストを最強の兵器としての地位を確立した大きな要因の一つでもある。」

QBの機能の説明には皆啞然としている。

「映像で見たお主の機体が凄まじい速度で動いていたのはこの機能のためか」紅蓮が納得したような顔をする。

「三つ目が、プライマルアーマー(PA)機能だ。防御機構の一種であり頭文字を取ってPAと略称される。ようはバリアだ。コジマ粒子の球状安定還流を周囲に展開することで、機体へのダメージを軽減・無効化させる。特に実体弾に対して高い効果を示し、既存の戦車砲や機関砲、小型榴弾やミサイルなどでは極々軽微な損傷しか与えられない。事実上実弾兵器には無敵に見えるが弱点もある。既存の兵器による集中砲火等によって、減衰、突破が可能だ。また、エネルギー兵器に関しては減衰率が下がり高出力であれば貫通もする。ただ、QB機構があるためそれらが困難な為に結果的に弾幕を展開する等と手段に限られる。コジマ粒子はジェネレーターで常に生成されているため、被弾による減衰も時間経過により回復させることができる。このPAがネクストの最強の機動兵器としての地位



を確立した最も大きな要因でもある。」

「このような機能があるとは、戦術機では歯が立たないぞ。」斑鳩が呟く。

「4つ目が、オーバードブースと機能(OB)だ。これは、コジマ粒子を利用し背部にあるブースターにエネルギーを回して急加速する機能だ。速度は機体によって異なるが、だいたい800km/h〜4000km/hぐらいだ。用はQBのスピードが長時間できると言うことだ。俺の機体では約1500km/hだ。ただし、OBはコジマ粒子利用する為、PAが減衰していくという欠点がある。無論OBをやめればコジマ粒子は再びチャージされる。」

「5つ目が、アサルトアーマー(AA)の搭載だ。これは、PAとして機体周囲に展開するコジマ粒子を収縮後に放射状に加速させ、自機を中心とした大規模のコジマ爆発を引き起こすものだ。ただし、これを使用するとコジマ粒子を一気に使う為、常時展開していたPAを失う。またOBも使えなくなる。コジマ粒子はフルチャージまで早くても20秒はかかる。その間戦闘力は著しく下がる。とはいえ、ネクストの武装では最強クラスの破壊力がある。」

「とんでもない兵器だな。こんな物を人が操作可能なのか？」月詠がそう口にする。

「以上のような機能を有したネクストを企業側は開発、勝算があると判断して戦争突入した。」

「どのくらいのネクストが投入されたの世界と相手に戦争するのだからかなりの数が必要でしょ？」香月が尋ねる。

「いや、投入されたネクストは、30機にも満たない数だ。その数で戦争を行い。勃発からわずか一ヶ月程度で、企業側の圧倒的勝利で終結した。」

「……なっ!!!」「……この結果には、全員が驚愕した。」

「た、たった30機で、それも一ヶ月で国家を！」巖谷が言う。

「それほどのものなのかネクストとは……」斑鳩は呆然と呟く。そこに香月が、

「ちょっとまちなさい。何で30機しか投入できなかったの機体が準備できなかったの?」

そう尋ねてくる。

「いや、機体が用意できなかったのではなく、ネクストに乗れる「適正」を持ったものが30人しかいなかったのだ。」

「適正?どういうこと」香月が尋ねる。

「先ほど、月詠大尉が言ったことを覚えているか、「こんな物を人が操作可能なのか?」と

ネクストは、従来機とはことなり搭乗者の脳と機体を直結させる脊髄や延髄を経て脳神経系の電気信号を直接統合制御体にする次世代型の機体制システムAMS(Ale-gory-Manipulate-System)を採用している。」

「人間脳と機体を直結ですって!」夕呼が驚く。他の者もそうだ。

「馬鹿な!それでは乗っている者は、機械の一部と同じではないか!」紅蓮が怒りに震える。

「では、レイヴンお前は自分の体を!」月詠が尋ねる。

「ああそうだ。俺の首の後ろに見えにくいがプラグを差し込む部分がある。見えるか。」

月詠が近づいて首の後ろをみるよく見ればそこには普通人間であればけて付いていないものがあつた。

「こんな、こんなことが許されるのか・・・」月詠はもはや言葉でない。

「話を続けるぞ。このAMSによってネクストはノーマルと比較して極めて高い反応速度や制御能力を得ることとなった。ネクストを稼働させる上でAMSとリンクスの意義は非常に大きく、AMSなしでの操縦には「極めて統制のとれた十数人のチームが必要」とまて言われるくらいだ。しかし、脳に電気信号を流すという性質上、人体にかなりの負担を強いるものになりさらに、流し込まれた電気信号を情報として処理できるか否かもほとんど個人の先天的な才覚に依存し、訓練などによる後天的な獲得は不可能であるため、AM

Sの適性を有する者〃リンクスたる資格を持つ者の数自体が少なく、一種の天才して扱われる状態になってしまった。企業連が30機だけで戦争を起こしたのもリンクスの数が限られていた事が原因だ。また、過度のリンクは精神と肉体に多大な負担を強いる。適性の低い者はそのせいで精神汚染を受け、廃人になる事もある。これは、コジマ粒子による汚染が一番の原因だ。」

「ちよつとまつてコジマ粒子の汚染てなに？」香月が尋ねる。

「コジマ粒子もいい目ばかりではない。使用することで広範かつ長期にわたり環境を汚染する性質があり、生態系への重大な悪影響及ぼす。ネクストが戦場に出始めたせいで地上の環境汚染が進み人が住める土地がほとんどなくなり、一部の人間は空での生活を余儀なくされている。また、人体にも悪影響で寿命縮み最悪の場合は、死ぬこともある。」

「じゃあなに！あんたは、汚染物質ばら撒いて戦っていたの！！」香月が言う。これにはさすがに皆が厳しい目を向ける。それはそうだが放射能よりもたちの悪い汚染物質をばら撒きながら自国で戦闘されては堪らない。

「本来であればそうなるはずだが、こちらに来てから戦闘中に大気中のコジマ粒子を計測していたが、なぜかいくらか計測しても大気中のコジマ粒子は0%しか表示されていない。」

「その計測する機械が故障してるんじゃないの？」

「いや、システムチェックでもエラーは出ていない。本当に汚染が無いようだ。しかし、一応確認は必要だ。」

「当たり前でしょ！汚染物質なんて冗談じゃないわよ！」

「しかし、確認は必要ですね。巖谷中佐、技術廠でその作業をお願いできますか？」悠陽が巖谷に尋ねる。

「わかりました。こちらで作業の方はお任せください。」巖谷が答える。

「しかし、たった30機で国家をそれも1ヶ月で勝利するとは、リスクもあるがそれだけ強力な兵器ということか」斑鳩が言う。

「これが後に「国家解体戦争」と呼ばれる戦いの結末だ。次に見せるのは、俺の戦闘記録だ。」そう言うと俺はログを操作して記録を見せていった。

「これで戦闘記録は終了だ。何か質問は？」周りを見渡して尋ねる。皆一様に疲れた表情を浮かべている。

「何だ全員が疲れた表情浮かべて？」俺がそう言うと

「あれだけの事話されれば誰だってこうなるわよ」香月が反論する。「まあ、これだけの証拠があればアンタが別の世界から来た言う私の推測も正しかったようね。」

「うむ、これだけの物を見せられればいやでもそう思わない方がおかしいな。」紅蓮が同意する。

「とはいえ、これはここにいる者達での話にしたほうがいいでしょう。」と巖谷が言う。

「と言っても、こんな他にしたところで頭がおかしくなったと思われまますよ。ははは。」

「たしかに鎧衣課長の言うように頭がおかしくなったと思われるのが落ちです。」斑鳩が同意する。

「しかし、レイヴンお前はこれからどうするつもりだ？」月詠が尋ねる。その問いに俺は、

「どうする？俺は傭兵だ。戦場で戦って糧を得ている存在だ。世界が変わるうがそれは変わらない。」と答える。すると

「レイヴンそなたに頼みがあります。」悠陽が話しかけてくる。

「頼み？なんだ。」俺が尋ねると

「この帝国の為にそなたの力を貸していただけないでしょうか？」

「で、殿下！」

月詠が驚きの声を上げる。周りの皆も驚いている。

「今帝国はBETAの進行を受け存亡の危機に瀕しています。今は一人でも戦えるものが必要なのです。そなたの力をぜひ貸していただけないでしょうか？」悠陽がそう尋ねるが、

「断る。」

「えっ！」

俺の返事に悠陽驚く。

「將軍様は、何か勘違いされているようだ。俺が戦うのは俺自身の為だ。他人が死のうが国が滅びようが俺には関係ない。人助けの為に戦うつもりは毛頭ない。」

俺はそう返答する。

「では、我々を援護したのはなぜだ？」斑鳩が尋ねる。

「自分の置かれている状況がわからないことは、危険だ。そのために情報を得る必要があった。だから助けた。もつとも自分が別の世界に来たとは思わなかったがな。」そう答える。

「君は、目の前で失われていく命があっても何とも思わないのかね？」鎧衣尋ねると、

「命？それがどうした？人の命はこの世で一番価値の無いものだ。」俺の答えに皆が愕然とする。

「そういう訳だ。將軍様。人助けなら他に頼むんだな。」

俺がそう言つと

「きつ貴様ああ！！殿下に対して！！！」

「ま、真耶さんおやめなさい！」

悠陽が止めるのも聞かずに月詠は刀を抜いて俺に切りかかってきた。

「馬鹿が・・・」そう呟くと俺は片手で刀を受け止める。

「「「「！！！！」」」これには切りかかった月詠も周りの者も驚く。

「こんな物では俺は殺せない」そう言つと俺は刀を離す。

「き、貴様は一体何なんだ？」月詠が俺を見ながら尋ねる。

「そうだな。その問いに答えよう。俺の世界では戦争が当たり前世界だった。当然強くならなければ生き残れない。それが普通だ。そんな世界では手っ取り早く力を手に入れる方法もいろいろ開発された。俺は、その中でももつとも一般的だった方法で力を入れた。」

「それは、ネクストのことか？」斑鳩が聞く。

「違う。俺が行ったのは「強化手術だ」。」

聞いたことが無い言葉に皆首を傾げる。

「この世界でも考えられているんじゃないのか？強化手術とは自分の肉体を改造することだ。」

「自分の肉体を改造だと？」

「そうだと具体的には、機体の激しい機動や衝撃に耐えるため骨格を特殊な金属で覆う、内臓を薬物で強化、機体センサー・制御装置を脳神経と直結させるコネクタ類の埋め込み、神経の光ファイバー化、脳内にレーザーシステムの内蔵等の手術を行った。簡単に言えばサイボークだ。」俺はそう答える。

「狂ってるわね。やる方もやらせる方も。」香月が言う。

「何がだ？周りの連中もやっていたことだ。ならば自分もしなければ生き残れない。俺は、生きる為に、戦う為にそれをした、それだけだ。」

「なるほど、お主の目を見て強い意志を感じたが、それは「生への執着」の意志だったのか」紅蓮が言う。

「そうだ。俺にあるのはそれだけだ。それ以外に無いからだ。」

俺はそう言った。すると

「そうですね、それがそなたの意志なのですな。」

悠陽が話しかけてくる。そして、

「ならばなおの事そなたに頼みたい。この国の為に力をお貸しください。」

先ほどと同じ事を悠陽が言う。

「言ったはずだ。俺には関係ないと。」

そう言った俺に

「いえ、力を貸していただきます。」

と悠陽が返してくる。一旦下を見てから顔を上げ何かを決意したような表情で驚きの発言をする。

「我が日本帝国がそなたを雇います！」

悠陽の発言にその場にいた全員が驚いた。

### 第3話（後書き）

何かキャラの性格や言葉遣いが書いているうちにおかしくなってしまうた。やはり文才ないのからか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4466ba/>

---

Alternative その答えは

2012年1月13日02時47分発行